朝日新聞社發行

週刊少國民

昭和十七年七月十五日第三種郵便物認可（毎日曜日發行）
昭和十八年八月十五日發行・第二卷第三十三号（通卷第六十五号）

伸ばせ はばたけ
興亞の翼

獨立したビルマ國の
バーモウ首相令息ザリーモウ君

11錢

昭和十八年八月十五日號
（第二卷・第三十三號）

水にすむ昆蟲座談會

皇軍の新兵器　その四

斷崖攀登具

陸軍兵器行政本部陸軍少佐　吉永義尊

日本軍はおよそ人の通れさうもないと思はれる所を通つて、幽靈のやうに戰場の到る所から奇襲してくる、といつて敵は恐れをなしてゐます。しかしそれは何も日本兵が猿のやうに身輕に戰場を飛び廻ることができるといふわけではないので、その蔭にはやはり隱れた兵器の働きがあります。斷崖攀登具はその一つです。これは海岸の斷崖や、谷や、地の割れ目を通過するに使用する兵器です。斷崖を登るにはまづ綱を崖の上に投げ上げることが必要です。この爲にロケットを使ひます。綱を投げるやうな場合にはロケットは大層都合がよいのです。それは速度が彈丸のやうに始めから急に速くはなりませんから、綱が切れないからです。綱が一本崖の上にあがれば後は兵が攀登ることができます。そこで梯子をかけ、起重機を組立て、次第に多くの兵が素早く、また大事な兵器も樂々と吊上げて、忽ちにして大きな部隊が斷崖を越えて前進する事ができるやうになります。かうして敵の恐れる日本軍の奇襲が行はれるのです。

る上りべすを上の子梯の鐵るすを目役のルーレ　てゐていつが車はに台たせのを銃關機

るゐていつが綱い長はに錨　るげあち打に上の崖をトツケロたいつの錨で械器のこづま

る登が兵の登先てつ傳を綱たいつに錨　るげあり吊に上崖を材器い重で機重起

銃後と銃後の戰だ

生活を改めよ必勝の道へ

なぜ草を刈らねばならぬか

みなさんもきつと刈つてゐることでせう、野や山に青々といちめんに茂つたあの夏草を。いま、わが國では、國土をおほふ草といふ草を刈りとるために、一億國民がこぞつて鎌をふるつてゐます。草を刈れの聲にいきほひづいて、鎌もけんめいに草にかみついてゐます。

どうしてこのやうに草を刈らねばならないのでせうか。今おこなはれてゐる草刈りは毛がのびたから散髪をするといふやうな、ぱうぱうと茂つた野原をきれいにするための草刈りではありません。草を得るための草刈りなのです。草は牛馬などの家畜の大切な飼料です。牛馬がわれわれに乳や肉をささげてくれるばかりか、人手のたりない農村で大きな働きをしてゐる食糧増産の戰士であることは、みなさんもよく知つてゐるでせう。草はそのうへに大切な肥料にもなります。いはば草は食糧増産になくてはならぬものといつてよいのです。一億國民がけんめいに鎌をふるつてゐるのは、この大切な〝草の幸〟をたくさん刈りとつて、戰つてゐるわが國の食べものをうんとふやさうといふためなのです。戰つてゐる國が食べものを十分に持つてゐることは、必勝への確かな道です。この必勝への一本道を、いま、一億國民が鎌をふるつてぐんぐん進んでゐるわけなのです。

着物も戰力だといふわけ

ところでみなさんはまた、十日からおこなはれた〝着物類は新調をやめ間に合はせでいかう〟といふきびしいとりきめを知つてゐるでせう。これは戰爭がますますはげしくなつてきた今日、ぜいたくな着物やぞろりとした長い着物などを着てゐる時ではない、着物の生活をうんと簡單にして、質素剛健な氣もちで勝ちぬかう、といふためにつくられたものなのです。それによると、まづぜいたくな品物や高い値の品物は、もう全然つくらないで、戰つてゐる生活にどうしても必要なものだけをつくるといふことにきめられました。そのため品數を今までの品數の約四割くらゐにまで減らされました。織物やメリヤスなどの生活用品などは、今まで一千五十六種だつたものが、四百四十四種に限られました。

また着物になる資源を節約するために、今まで二丈八尺から三丈三尺の長さであつた着物用の織物を、男物は二丈六尺、女物は二丈五尺といふふうに短くし、帶なども一丈一尺の長さで幅一尺一寸であつたものを長さ九尺、幅六寸といふふうにちぢめてゐます。このためいままでのやうな長袖や長帶はできなくなつたわけで、男は筒袖、女は元祿袖の短い袖でがんばることになつたのです。

さらに絹物の衣料切符の點數をあげたり、新しく規定の大きさをこえ

上の寫眞は、八月一日新首都ラングーンでビルマ建國議會が開かれ、獨立を宣言した瞬間の歴史的な光景

ビルマ國獨立の瞬間

〝興亡を重ねた王朝の歴史〟

です。壇上は宣言文を讀む厚生宣傳大臣バンドラ・ウ・セイ氏、右側×印の動一等大綬を佩してゐるのがバーモウ國家代表。また下の寫眞はこんどきまつたビルマ國旗です。（翼をひろげた孔雀を中心に、上段は黄、中段は緑、下段は赤）

なほビルマ國の歴史は西暦前九〇〇年ごろ中央アジヤから南下して來たアリアン族が、イラワヂ河の上流にダガウン王國を建設したのにはじまります。その後西に、南に勢力をひろめ、やがてプロームを首都として古代プローム王國を築いた。これが今日のビルマの祖先の國です。

しかし西暦七四二年にマライ方面から來たクライン王國のため一度ほろぼされたが、名將アナウラータが、やがてあらはれるにいたつて、これを追ひはらひ、つひにパガン王國を建設しました。

それより五百年榮えてビルマを統治し、パガン文化をうちたてたが一二七七年蒙古王クビライのため滅されてしまひました。

それから三百年間外國の支配の下にあつたところが、一七五五年アラウンパヤ王があらはれて、ラングーンにビルマ王國を築きあげました。

そののちますます榮え、一八二二年ビルマ王國の最盛時代を迎へましたが、このころからイギリスの魔の手がのび、一八二六年には第一次の英緬戰爭が行はれて敗れました。

このためアツサム、アラカン、テナセリムの三地方を奪はれたが、一八五二年再び戰をいどまれて敗れ、ペグー、イラワヂ、シャンの三地方をイギリスに奪ひとられた。そしてつひに一八八五年三たびイギリスは軍をすすめて、その後六十年間壓政をほしいままにしてゐたのです。

週刊少國民
昭和十八年八月十五日號

表紙『喜ぶザリーモウ君』

銃後と銃後の戰だ……三
ビルマ國獨立の瞬間……三
新しくきまつた國立公園……四
週間の動き……五
連載物語 大いなる朝……石川達三　清水崑畫……六
白雲の切れ目に緑のビルマ平原……宍倉恒孝……八
〝豫科練〟うれしいこと悲しいこと……岩田豐雄……一三
水にすむ昆虫　古川晴男先生にきく……一四
ぼくの〝産業少年戰士〟の手紙……德永　直……一六
〝私の報告〟をつのる……一六
航空發動機の話……富塚　清……一八
◇傳書鳩（各地のたより）……一八

グラビヤ

皇軍の新兵器　斷崖攀登具（吉永　義意）
新生ビルマ國地圖
ビルマの子供（大木　榮一）
ナマリン王城物語（松下井知夫）
山にも強い若武者（若林　善三）

本誌所載の軍關係寫眞（繪畫）はすべて陸軍省檢閲濟並に海軍省許可濟第五五号

連載物語

大いなる朝

(2)

石川達三

清水崑(畫)

牧野弘の考へでは飛行機の翼を蝙蝠のやうな形にして、動く翼をつくらうと思つてゐた。速い速力で飛ぶときは翼をひらいたままプロペラの力で飛び、着陸するときや爆弾投下のときは翼を動かし、プロペラをとめてゆつくりと空に浮かんでゐるやうにする。さうなれば飛行場が草つ原のやうにせまくても着陸できるし、航空母艦だつて小さくてもすむはずだ。爆弾投下だつて高い一萬ぐらゐの空から落しても命中するやうになるだらう。これがほんたうにできたらすばらしい。

「明雄君、僕は明日、蝙蝠を捕りにいかうと思ふんだ。君もいかないか」

夏休になつて四日目のことだつた。電燈の下で復習しながら弘がさういつた。

「蝙蝠をとつてどうするの？」

そばで縫物をしてゐた明雄のお母さんがきいた。

「秘密です。とても凄い發明をするんですから、できるまで誰にもいはれないんです」と弘が叔母さんに答へた。叔母さんはにつこり笑つた。しかしそのとき叔母さんは弘が飛行機の翼を發明しようとしてゐることを知つてゐた。牧野博士も飛行機の研究をしてゐたのだつた。叔母さんにとつてはたつた一人の兄さんである、博士が行方不明になつて、その子の弘がいま父の志をつがうとしてゐるのだ。叔母さんは弘の志を知ると、そつと袖で眼を拭つた。明雄は「さうだ、僕もいつしよにいかう。僕の捕蟲網があるからあれを持つていかう」といつた。

次の朝、二人はお辨當をこしらへてもらつた。赤い梅干がまん中にはいつてゐて、おかず入れにはらつきようとどばうと卵やきとが入つてゐた。

蝙蝠は生かして持つて歸り、部屋のなかで飛ばして、羽の動き工合を研究しなくてはならない。弘は杉本の叔父さんの鳥籠をかりることにした。前に文鳥を飼つてゐた金網の籠で、これなら三十匹ぐらゐ蝙蝠を入れられるだらう。

川向かふの洞穴へはいるのだから明雄は自轉車用の電燈をもつた。弘はローソクを二本とマッチとを用意した。蝙蝠といふやつは夜になると空を飛ぶが、晝は明かるいところがきらひだから、木の穴や岩の洞穴などにかくれてゐる。このあたりではたいてい十ぐらゐの大きさだが、ねずみと同じ種類の獸だから嚙みつかれるかも知れない。二人は手袋ももつていくことにした。

朝の十時ごろ二人は家を出た。

「氣をつけなさいよ」とお母さんがうしろから聲をかけたが、

「大丈夫です」と明雄は氣にもしなかつた。

山は町はづれの川を渡つてしばらくいつたところである。海にそうて二町ばかりの道であつた。海は、このあたりは砂濱で海水浴にとてもいいが、もう少し向かふは山の崖が急に海にはいつてゐて、その下は恐ろしく深かつた。そのあたりは不思議な渦がまいてゐるからといふので、濱の漁師も近づかない。漁師はその邊を坊主ケ淵といつてゐた。坊主ケ淵の岩壁の奥の方には一つの洞穴があつて、まつ暗な穴の入口が見えてゐるといふ話であつたが、穴の奥がどうなつてゐるのか、誰も知らなかつた。

その上の方は鋭い崖のつらなつた岩山で、山のなかはまるでボルネオのジャングルみたいに太い木や蔓草が茂り、晝間でもうす暗いところである。山へのぼるには蔓草を刈り岩壁をよぢのぼらなくてはならないので、近頃はほとんどいつた人もなく木樵もこの山にはいらなかつた。

二人の少年がいかうとする洞穴はこの秋澤山のずつと下の方、海にちかいところで、ふもとから五十間ばかりのぼつたところである。十年ばかりまへに、この秋澤山から銅が出るといふことで、たくさんの鑛夫が町に入りこんで掘つてみたことがあつた。まる一年ばかりも掘つてみたらしいが、銅は出ても分量が少くてとても、まうからないといふので、中途でやめてしまつた。掘りかけた工事はそのままふかい洞穴になつて今も殘つてゐるのである。

二年ばかりまへには、穴のなかに乞食が住んでゐたとか狼がゐるとかいふ話も聞いたことがあるけれども、日本には狼なんかゐないんだからその話は信用しなくてもいい。中學生が三人ばかり去年の夏その穴へはいつて、蝙蝠を十匹ばかり捕つてきたのを明雄は見せてもらつたことがある。

よいお天氣で、暑かつた。二人の少年は川を渡つて山道にさしかかると少々疲れてきた。明雄は、

「ねえ、穴へはいる前にお辨當をたべようよ。穴のなかでは食べるところもないし、第一穴へはいつたら大活動をはじめるんだから、まづ食べておく方がいいよ」といつた。

弘もそれには贊成だつた。

杉の太い木が茂つてゐるあひだの細い道をふみ分けてのぼつていくと枯枝をかついで山を降りてくる老人に會つた。

「小父さん」と弘が聲をかけた。

「洞穴へいくんですけど、ここを登つていけばいいんですか？」

木樵の老人は二人の少年をしげしげと眺めてから答へた。

「洞穴はここから三十間ほど上だがここから上は草がふかくて歩きにくいからやめた方がいいよ。お前たちなら體がかくれるほど深く茅が茂つてゐるんだ」

「大丈夫です」

「洞穴へなにしにいくんだね」

「蝙蝠をとりにいくんです」

「蝙蝠ならたくさんゐるが、洞穴から上へはいかない方がいいよ。道らしい道はないんだから、迷つたら歸れなくなるよ」

「さうですか。どうもありがたう」

弘少年は先に立つてがさがさと草を分けてのぼつていつた。足はゲートルを卷いてきたから大丈夫だが、手は茅の葉で切れて血がにじんできた。明雄少年も勇敢にあとをついていつた。額に汗が流れてきたが、山は深く、木かげの風は秋のやうに冷えびえしてゐた。ふりかへつても町の方は見えず、聞えてくる物音もなかつた。

しばらく登ると、洞穴から掘り出した泥や岩をすてた跡が見つかつた。大方は草が生えてゐるが小山のやうに盛り上げてある色の變つた岩であつた。

そこは少し立木が伐り拂はれたと見えて、見透しが利いた。そこから上の山はもう切り立つたやうな岩壁で、のぼらうにも登る道はない。その屏風のやうな岩の下にぽかりと黑く穴が見えた。「ああ、穴だ！」

と明雄が叫んだ。

弘少年はそれを見るとじつと立ちどまつた。「何だか、こはい穴だねえ」

人ひとりゐない岩山の奥にぽかりと空いてゐる洞穴は、そのなかにどんな恐ろしい秘密があるかわからないやうな氣がしてこはかつた。

「大丈夫だよ」と明雄はいつた。

「穴のいちばん奥まではいらなくつたつて、蝙蝠さへとればいいんだものね」

明雄の方が勇敢であつた。二人はそつと穴にちかづいて中の方をすかしてみた。

外の光はあまり奥まではとどかないが、入口から二十間ばかりは見えてゐた。穴ははじめはまつすぐに奥へはいつてゐて、なにもなかつた。入口のあたりは古い苔が生え、天井から水がぽたぽたと落ちてゐた。下は岩だらけで、低いところには水がたまつてゐた。

「蝙蝠なんかゐないぢやないか」弘君はだんだん氣味がわるくなつてきた。

「明かるいところにはゐないさ。もう少し奥の方へいけばきつとたくさんゐるよ」

年下の明雄にはげまされて、弘もあとへ引くわけにはいかなかつた。

「まづお辨當をたべようよ」

「さうだね」と弘も風呂敷に包んできた辨當を出した。

山の小鳥が二三匹啼いて飛んだ。二人は岩のうへに腰をおろして辨當をひらいた。お母さんの作つてくださつたお辨當はおいしかつた。坐つてゐると山の空氣は寒いほど冷たかつた。

「靜かだねえ」と弘がいつた。「あんまり靜かすぎてさびしいや」

高い木の上でなにか動くものがあつた。じつと見てゐるとりすであつた。小さなりすは木の枝から枝へやうずに飛びうつつて、やがてどこかへ消えていつた。

辨當をたべ終つた明雄は腹を叩きながらいつた。

「もう十二時ごろかな。早く捕つて早く歸らうよ。ね」

「うん」

それから二人はローソクやマッチをすぐ出せるやうにポケットに入れ辨當箱や水筒は穴の入口に置いて、捕蟲網と鳥籠だけをもつて、明雄を先頭に穴にはいつていつた。明雄の照らす自轉車ランプが丸い明かるい輪を描いて照らし出される岩壁は赤い錆色をして、山水がそこここからぽたぽたと光りながら落ちてゐた。穴は最初二十間ばかりまつすぐだつた。そこから急に左に曲がつてゐる。曲り角まできて奥を見ると、どこまでつづくかわからない眞暗なやであつた。不意に弘があッと叫んでかがみこんだ。

「どうしたんだ？」と明雄が叫んだ。

「何かゐる、なにかゐたんだ！　僕の耳のそばをぶんと音をたてて、なにか飛んでいつた」

弘の聲は慄へてゐた。

「なんだらう。蝙蝠だらうか」と明雄がいつた。

……つづく……

前號のあらすぢ

また夏休がきた。伯父さんが行方不明になつたのはちやうど去年の今ごろであつた。杉本明雄君は國民學校の五年生になつた。伯父さんの牧野理學博士はお母さんのたつた一人のお兄さんであつた。伯母さんは二年ほど前になくなり、家には明雄君より一つ年上の弘君といふ從兄がゐて二人は仲のよい友達であつた。伯父さんの行方不明は弘君が明雄君の家に遊びに來た間のことであつた。明雄君の家に引きとられた弘君は父のあとをついで飛行機の研究をしようとまづ蝙蝠の羽から特殊な翼を考案しようと思ひたつた。蝙蝠ならば川向かふの洞穴にいけばいくらもゐた。

獨立ビルマの地圖

君達が次の荒鷲だ

先輩に續け！

みんなの憧れの豫科士官學校生活、航空士官學校生活、そこに鍛はれる荒鷲の精神、それがまなく「愛機南へ飛ぶ」に描かれてゐる。

「愛機南へ飛ぶ」こそ君達の映畫だ。今日も索敵偵察機を駆つて南の空へ征く先輩が君達を呼んでゐるぞ。

陸軍航空本部監修
松竹總動員空の巨篇

愛機南へ飛ぶ

九月初旬公開決定

陸軍航空本部・海軍航空本部指導

ビルマの子供

本社特派員
陸軍報道班員 大木 榮一

佛塔の國ビルマでは、男には必ず一生に一度お坊さんになる儀式があり、五六才頃に行はれます。また少女には耳飾りの穴あけ式があります。日本の七五三のお祝ひのやうなもので、お坊さんを始め親戚や近所の人達を招いて、踊りや御馳走で賑やかに祝ひます。この式のすまない中は、少年も少女と同じやうな子供髷を結ってゐます。水祭、花祭、火祭はビルマの三大祭といはれ、全國の佛塔やお寺は色美しく着飾つた人々で大變賑はひ、お花畑のやうに綺麗です。水祭には、ポンプやバケツで誰にでも水を掛けてよいのですから、子供達は大喜びです。

玩具を持たないビルマの子供達は、種種な遊戯をして遊びます。少年は相撲、少女は蹄りが殊に好きです。

「龜の卵取り遊び」といふのは、龜になつた者が、路上に石ころを五六個積み、その上に四ッばひになり、他の者は龜を取り卷いて龜さんの油斷してゐる時に卵を取るのです。龜は卵を取られては大變と、四方に氣を配りあつちこつちから卵を狙ふ手を、兩手兩足で巧みに拂ひのけます。

「鬪鶏遊び」といふのは、しやがんだままビョンビョンと跳び上り、左右の足を交互に後横に蹴り出し、時時兩膝を揃へて跳びながら、兩手を高く上げ下げして兩脚を叫いて元氣をつけます。相手が疲れた頃、膝頭で相手を押し倒します。鶏が砂を蹴ったり、羽搏きするのをよく眞似てをり、なかなか面白い遊びです。

みなさん ビルマの獨立を祝って、一つビルマの遊戯をやってみませんか。

ちたんさ娘たつ飾着るすり參おに塔佛てせのに頭を壺の花い高のり香いし美 に祭花

すまりあてめ納が經おや品遺の樣迦釋おはに塔佛 すで塔佛の一第マルビく輝に色金

いし美し點を火に皿油ふいと千何はで塔佛はに祭火

三の佛大の良奈 像迦釋寝金黄の一グペの大最界世

るれらへ傳とるあてめ埋が金黄な大莫はに下 りあも倍

水祭に馬車のお客様に水をかける子供たち
いつもなら大變叱られるところですが　この日ばかりはお客様もにこにこ笑つてゐます

シャン劍舞を練習する少年達　日本の唐手が傳はつたものらしくシャン・ジュウジツともいひます

鋪道で「闘鶏遊び」をする少女たち

大きな下げ袋に本や石盤を入れて學校に通ふ少女です　下げ袋は買物袋にもなります

長篇漫画
ソリマナ
の島ムコ
巻の壺宝
語物猿王
回五十弗
作 夫知井下松
ワタシガシラベテキマセウ
ヤシヤシタノヨム
アッオーランダ
オーランダタカラノバンニン
ナマリンモノハメイレイデス
タカラヲマモルオーランサマダ
タカラノツボヲ
トリニキタノハナニモーダ
ナマリンモノハタカラノツボヲジブンノモノニキメテヰルノデス
コラシメテヤラウヨ
ウンコラシメテヤラウ
コドモタチドコカラキタ
カミサマノクニカラキタノダ
タカラノツボヲウミノクニヘカヘシタマヘ
ナンダト
セカイヂユウノモノハ
ミンナナマリンモノダ
オマヘタチモハヤク王サマノケライニシテモラフトイイ
バカモノッ
ハヤクタベタイナア
タウモロコシノゴハンダヨ
オイモノゴハンヲタベマセウ
カボチヤモチカラヲアハセテヨクテキル
ソウサンヨ
オホキナコヒガトタア
ヒマノミガタクサンナッタヨ
モウスグヒカウキノオヤクニタツネ
増産漫景
原やすを
トンボ鉛筆
働け働け
少國民も
増産に
協力!!
少國民の
勉強は
トンボが協力
東京 株式會社 トンボ鉛筆製作所
パイロット
萬年筆
勝利へ 勝利へ
闘ふ姿いよいよ美くしく
産業戦力いよいよ逞まし
¥2.00

週刊少國民
八月十五日號
昭和十七年七月十五日第三種郵便物認可
昭和十八年八月十五日發行
第二卷第三十三号（通卷第六十五号）
賣價（税込）一部 十一錢
定價卷一部十錢 郵税一部一錢
特別行為税相當額一錢
（毎日曜日発行）
発行所 東京都麹町區有楽町二丁目三番地
朝日新聞東京本社
編輯兼印刷兼発行人 櫻木俊
地社晃
発賣所 朝日新聞
東京本社
東京都麹町區有楽町二丁目三番地
大阪本社
大阪市北區堂島之濱三丁目三番地
四國部
高松市紺屋町一八〇番地ノ一
中部局
名古屋市中區廣小路通二丁目一番地
電話
東京 一七三〇番
大阪 五五〇〇番
名古屋 二九六〇番
八五八〇番
配給元
日本出版會
會員番号 壱〇壱五〇参
東京都麹田區淡路町二丁目九番地
日本出版配給株式會社

花王クレヨン

タダシイ イロデ
キレイニ カケル

オ父サマ
オ母サマ方ニ
アタラシイ「エノホン」ノ
色ニ準拠シタ最新規格品
デス。

11色
15色
24色

學童用標準色クレヨン

花王クレヨン

花王石鹸株式會社長瀬商會

東寶映畫
超特作

東宝

海軍省後援

全篇に炸烈する壯烈無比の土浦魂
諸君の憧れの的「土浦海軍飛行豫
科練習生」の全貌映画化！

決戰の大空へ

高田稔
黒川彌太郎
小高まさる
原節子
英百合子
他潑剌新人男優陣總出演

脚本・八住利雄
演出・渡邊邦男
撮影・河崎喜久三

寫眞ハ海軍省許可濟第七二一號